式辞

何度も寒波が襲い、多くの積雪に疲弊した雪国の空にも、ようやく陽の光が朗らかな「春となり」の季節となりました。

このよき日に日頃からお世話になっている同窓会、ご来賓、保護者の皆さまのご出席を得て、今年度はこのように、定時制のみなさんと卒業のお祝いができることはまことに喜ばしいことです。

ただいま、定時制７名の生徒の皆さんに卒業証書を授与いたしました。本日お見えになっていらっしゃる保護者の皆様におかれましては、この数年のできごとが思い起こされ、お子様の成長ぶりを誇りに思っていらっしゃることと存じます。本日はまことにおめでとうございます。

今日、この懐かしい学び舎を旅立つ皆さんに折り入ってお話ししたいことがあります。皆さんに最後にお話ししたいのはプライバシーという言葉についてです。

プライバシーとは個人の秘密とか独りの生活、他の人には知らせない事という意味で使われていると思いますが、実はもっと深く精神的な意味合いを持っています。

私たちは人には自分を見せかけることができますが、自分だけは偽ることができません。自分はどう思っているか、自分はどんなことをしたいかを、自分から知らせなければ、周囲には知られることはありませんが、自分にだけは隠すことができません。自分に対して自分を偽ることはできないのです。そこで西洋では、プライバシーを大切にし、プライバシーこそその人の値打ちを表していると考えられました。プライバシーの尊重という言葉は、その人の秘密を守るという意味ではなく、プライバシーにおけるその人の姿こそ、本当のその人自身の姿だから犯してはならないということです。私たちはプライバシーをこそ、充実させ大切にしなければ本当の意味での成長はありません。

人に知られなければ何をしても良い、匿名であれば何を言っても良いという風潮がありますが、プライバシーという概念とはまったくかけ離れたことだということがお判りいただけると思います。

法隆寺の「昭和の大修理」などを手掛け、最後の宮大工と言われた西岡常一さんという方がいました。日本の古代の寺院は悠久の時を超えて現在に伝えられていますが、「千年先を思う」日本の木造建築のすばらしさを世に広めた方です。日本には本来、プライバシーという考え方はありませんが、この方の考え方には西洋のプライバシーと通じるものがあります。

西岡さんはお弟子さんたちに、他の大工と自分を比べるなと繰り返し言っていました。他人と自分を並べては、大工としての成長が止まるというのです。昨日の自分は「どこで手を抜こうとしたか」「どこで迷ったか」というプロセスをすべて知っています。その自分を鏡として向き合うことで、ごまかしのない成長ができるというのです。弟子たちには「隣の奴がどれだけ早く削るかを見るな。昨日のお前が削った木くずを見て、今日の刃の

入れ方を考えろ」と教えました。

卒業生のみなさん。私たちの成長は、静かにじっと自分を振り返ったときにこそもたらされる。他の人と比較して自分にないものがわかったとしても、それはあなたの次の一歩を生み出してはくれません。自分の中にある内なる声を信じている者が、真に満足のいく成長を遂げていくものなのです。他人と比べることなく、自分のプライバシーを大切にし、自分の肯定的な成長をいつも確かめている、そういう人になってください。

長野高校で過ごした３年あるいは４年の年月は、皆さんが自分の来し方を振り返るときに、あたたかな光を放つ思い出として、いつまでも皆さんの心のよりどころとなることでしょう。

最後に 皆さんの卒業を心から祝福している保護者の皆様、同窓会の皆様、ほか本校の教育活動に日頃から深いご理解とご協力をたまわっている皆様に、再び篤く御礼を申し上げ、式辞といたします。

令和８年３月２日

長野高等学校長　廣田　昌彦